

大入島研修記

常木 祐一

(会員 鶴見町沖松浦)

史談会の現地研修会が八月一日、行われた。今回は大入島(佐伯市)に残る旧跡と文化遺産の実地調査。同島は南北に長く、中央部がくびれていることから「ひょうたん島」の異名を持つ。史談会は近年の歴史学会で高まりつつある「海洋史観」(海からの視点による歴史解釈)の動きを受け「海から郷土を見直す」事を主眼に、昨年からは県南地方の島に残る歴史遺物の調査を実施。昨年の大島(鶴見町)に続いて二回目。参加したのは会員ら二十九名。フェリー乗り場がある石間浦より出発して島内を一周した。

午前九時、葛港よりフェリー乗船、石間にて下船。ほ

ど近くの白浜の山上に、大正天皇がこの地に訪れた事を記念する駐蹕碑がある。

明治四十四年十月、大正天皇(当時は皇太子)は海軍中将として豊後水道で行われた海軍大演習に参加。艦艇七十余隻とともに佐伯湾を訪れた際、山の中腹に飾られた「奉迎」の大文字に興味を引かれて島に上陸。親しく島民と言葉を交わした。天皇の振る舞いに感動した島民の手によって大正三年十月二十三日、駐蹕碑が建立されたという。現在、碑の周辺は桜の名所としても有名。

戦前には海軍航空隊も置かれ、軍都として栄えていた佐伯にふさわしいエピソードだと言える。



大正天皇駐蹕碑

その後、島内各地区に残る神社仏閣を巡る。しかし、その多くは記録がないために、創建の時期さえ分からないものが大部分を占める。

主な寺社名を列挙すれば、石間に彦宮三柱神社、荒網代に潮音軒と山王権現社、塩内に汐向院、日向泊に普該院、高松に大休庵、片神には蛭子神社などがある。

各寺社に残る遺物で特に目を引かれたものは、法華經の一節を刻んだ潮音軒の大乗妙典一石一字塔、六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天)を教化する汐向院の六

地藏だった。

この他、江戸時代

大乗妙典一石一字塔

に実測による初の日本地図『大日本沿海輿地全図』を作成した伊能忠敬が文化七年三月、測量のため大入島を訪れた際、本陣(宿所)にしたと伝えられる大休庵、また、毎年一月・五

月・九月の十八日に、地区民総出で長さ約十五メートルほどの

大数珠を繰りながら、南無阿弥陀仏と唱える百万遍講を開いて昔の伝統を今に伝える普該院など、調べるほどに興味は尽きない。

今年三月にオープンした大入島食彩館で昼食をとる。同館では魚介類や果物など、島でとれた食材を使った食事や特産品を提供。館内レストラン「グランブルー」ではフランスで修行した山田崇貴シェフが作る多彩な料理が楽しめる。その他、ごまだしやえそみそ、たこキムチ等の特産品を販売、釣った魚を干物に加工してくれるサービスなども提供している。

午後はまず、日向泊の神の井に向かう。佐伯を代表す



汐向院六地藏

る正月行事・大入島トンド火まつりに欠かせない神の火を点火する場所としても有名な神の井、その起源は遠く神武東征まで遡るといふ。伝説によれば、飲み水を求めて大入島に上陸した神武天皇が砂浜に折弓の先を突き立てた所、滾々と清水が湧き出した、それが神の井の始まりだとされる。

現在は湧出口の周囲を石で囲い、側には「豊の国名水神の井」と書かれた碑が建つ。海岸から離れること僅か数メートル。備えてあつた柄杓を使い、水を一口含んでみる。真夏の陽射しのため、やや生ぬるくなつていたが、塩気は全く感じなかつた。



豊の国名水・神の井

神の井から、日向泊の海岸に建立されている万葉歌碑に向かう。平成五年五月、地域の生活文化向上と観光振興を目指して建立されたこの碑も既に十年以上の歳月を重ねた。

直径約二・五メートルの自然石に刻まれているのは、万葉集巻十六の「豊後国(とよくに)のみちのしり)白水郎(あま)の歌」。市内の書家・樋口紫水氏が揮毫した。

歌の大意は「紅花で染めた衣は雨に濡れて色濃くなることはあつても、決して色褪せて薄くなるような事はない」。万葉集研究家で別府大学名誉教授の佐々木均太郎氏は、白水郎とは当時県南に住んでいた漁民、女性から結婚の証として紅い衣を贈られた海の男が「決して心変わりしない」その想いを詠んだ歌だとする。

また同氏によれば、漁民にとって紅は神



万葉歌碑

聖な魔よけの色。昭和初期まで現蒲江町の入津地区でも、少年たちへ成人の証として、赤いフンドシを贈る風習があったという。この「紅」という色を通じて遠く万葉の昔と現代がつながる、歴史の持つ雄大さをも感じられた。

今回の研修を通じて、大入島の歴史を明らかにすることは容易ではないと分かった。同島荒網代で発掘された東島古墳の存在は、古墳時代後期、六世紀頃には既に島民が居住していたことを示しているが、その後、中世、近世を通じて、島の歴史を伝える資料はほとんどない。僅かに中世佐伯氏の馬牧場が置かれていたという伝説が残る程度でしかない。古代より近世に至るまで、大入島は静かな一漁村で在り続けたという事だろうか。

明治期に入ると、大入島を訪れた作家や学者が記録を残している。文豪・国木田独歩は大入島の紀行文を著し（散逸して伝わらず）、日本民俗学の祖・柳田国男はその著『海南小記』で「此入海（＝佐伯湾）では大入島が最も大きく、幾つかの網代と美しい清水とがある。娘たちが帆を操って毎日町に往来して居る村である」と島の情景

を描いている。

近年はマリンハウス海人夏館、大入島食彩館などの施設が建設され、少子高齢化が進む島の活性化が図られているが、反面、動きの見えない大入島架橋問題、島民を二分した石間埋立問題など、静かな漁村だった大入島は、史上初めて政治の荒波に揉まれていると言えるだろう。



マリンハウス海人夏館前にて記念撮影